

フランシス・ベーコンにおけるスペース・フレームについて

尹 志慧 (同志社大学)

フランシス・ベーコン(Francis Bacon, 1909-1992)の絵画には、人物の周りに白や黒の線で描かれるいわゆる「スペース・フレーム(space-frame)」が頻繁に登場する。現存するベーコンの油彩画 584 点のうち、129 点にそれを確認することができる。これらは、彼の画歴をとおして描かれ続けたが、とりわけ 1950 年代の作品の特徴として取りあげられることが多く、ベーコン自身は「カンヴァスを小さくしたのと同じ効果を出す」ためにスペース・フレームを用いると説明している。

このフレームの重要性に注目し、初めて詳しい分析を行ったのはジル・ドゥルーズ(Gilles Deleuze)であった。彼は、『感覚の論理』(1981)の中で「平行六面体 (le parallélépipède)」という単語で、それを人物を隔離する装置として提示している。以後、様々な論者がスペース・フレームの意味に関する見解を述べてきたが、近年の見方は、大きく二つに分かれると発表者は考える。それをジャコメッティの彫刻《鼻》(1947)のフレームのように見るか、あるいは、緞帳前のエプロン・ステージのようなものとして見るかという二つである。

しかし発表者はスペース・フレームには人物の隔離、彫刻台、舞台といった理解だけでは十分に捉えきれない部分があると考え。フレームというより「線」に近い初期のものや、人物に突き刺さったように描かれる 1960 年代のものにおいて特にそう言えよう。従って本発表は、以上のような先行研究を補う見方を提示することを目的とする。スペース・フレームに関し、これまで詳しい分析が行われてこなかった初期や後期の作品を含めて時代ごとに分析する。それによって、初期においては「人物がどのような空間の中に置かれているか」を示すために描き足された線であったこと、1950-60年代においては「人物に意識を集中させる」ために描かれたフレームに変化したこと、さらには「人物の一部のごとく、人物が占めうる同じ範囲を持つもの」になったと主張する。言い換えると、スペース・フレームは必ずしも背景や空間に属するものでなく、人物に属するものでもありうることによって、ベーコン作品の全体像を捉え直す一つの鍵として、注目すべきであると主張する。

本発表を通して、ベーコンがいかに人物をカンヴァスの中に据えているか(to situate the figure)を紐解くとともに、ベーコン研究におけるこれまでのスペース・フレームの見方、すなわち、人物と単色面の背景といった両項の緩衝地帯の一つという見方に新たな解釈を提示したい。